

肥満と地球環境 - 人類栄養学からの一考察

著者	野村 秀明
雑誌名	神戸常盤大学紀要
号	10
ページ	132-132
発行年	2017-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1492/00000410/

肥満と地球環境 ―人類栄養学からの一考察

野村秀明

【はじめに】人類は、常に飢餓との闘いの中で、その生物学的進化を遂げてきた。しかし、近年の急激な“飢餓から飽食”の変化は、ヒトの内環境のみならず、外環境にも甚大な影響を及ぼしつつある。今回、ヒトの肥満が地球環境に及ぼす影響について人類栄養学の観点から考察する。【飽食と肥満の現状】飽食の時代に入り、特に先進国における食肉消費量は爆発的に増加し、2015 年には 3180 億トンを超えた。この食肉供給に資する畜産業の隆盛は、一方で森林・草原の破壊、生物多様性の喪失、さらに地球規模の水不足を引き起こしている。世界の穀物生産はヒトの食糧のためばかりでなく、今やその 48%は畜産肥料と化している。かくして家畜は増え（牛 14.6 億頭、豚 10.4 億頭、羊 11.3 億頭、鶏 198.6 羽）、ヒトも増え（72 億人）、そして肥満化（先進国の肥満率は 61%超）している。【肥満と地球環境】地球は生命を宿す星である。この地球の環境を破壊する地球温暖化の元凶は、大気中の二酸化炭素（CO₂）である。本来“独立栄養”を営む植物系に対し“従属栄養”で生きる動物の過剰増加が CO₂ の増加を産み、いわゆるカーボン・ニュートラル律の破壊を引き起こしている。ヒトに起因する CO₂ 産生の多くはエネルギー生産・輸送その他の産業性 CO₂ 産生であったが、今や家畜業がその 20%超を占めるようになっている。地球環境維持（sustainability）の観点から、現在の食生活は人類を誤った方向（自滅）に向かわしめている。今こそヒトは肉食の美味を捨て去り、本来の菜食に戻るべきである。